

富山県日ソ友好使節団シベリアに行く

豊田 文一

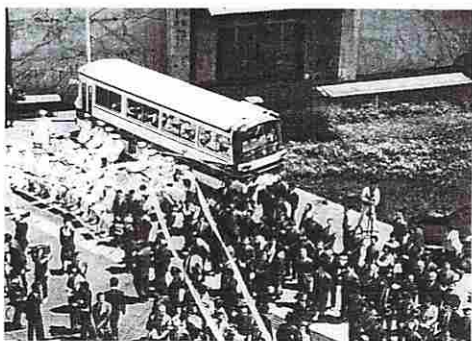
かねて計画されていた日ソ友好の旅が、新湊市を中心に行われることを聞き、これに参加させてもらうことにした。新湊市は市長、市議などで、私は全くのアウト・サイダー、9年前、金沢大学長当時、訪ソ学術交流団長として以来である。こちらからの訪問団は約50名、5月15日未明高岡より高速道路を利用して約4時間にて新潟港着。新潟に来てみると新潟県や東京よりの人々と合流し、約300名近い大団体となり、驚かされた。

船はすでに接近している。岸壁は信濃川河口である。しかもこの船はルーシ号といい12,798トン。かつて佐渡へ渡ったときここを利用したことがあるが、信濃川はこのような大きな船を係留できる良港とは始めて知った。成程1672年(寛文12年)に奥羽回米の寄港地に幕府より指定されただけある良港である。

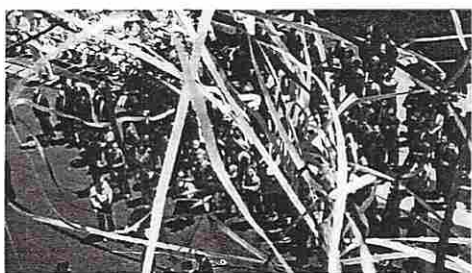
さて乗船の名称ルーシであるが、ロシアを意味する。ロシアという言葉が、文献に使われたのは15世紀以来で、公式に用いられたのは18世紀始めそれまで Rus (ルーシ) という語であった。今でもロシア人を意味する語はルースキー Russkii で、ルーシーの形容詞でもある。もともとスカンジナビヤのバルト海沿岸に住んだ人たち、舟をこぐ人の意味でローツイと呼んでおり、その呼称が東スラブ人に伝わり、これが最初の国名となった。また赤っぽい髪の色をさすルースイ Rusyi を語源という説もあり、あるいはドニエプル河の一つロージ河がルーシという名称が生じたという説などがある。

出帆間近になると岸壁に数百人の見送りと

歓送のプラスバンド、船上より投げられる五色のテープ。



(第一図)



(第二図)

ウラジオストックまでの航行、約50時間の予定。出帆の汽笛を鳴らしつゝ日本海にでる。海は多少のうねりがあるが、白波もたたず、快適の航海のように思える。この船の速力は時速20ノット、晩餐は大食堂、全員を収容するに足る。夜になるとミュージック・サロンに移る。女性の乗員によるダンスや歌唱が始まる。

ただその頃より、船酔いが出始めてきた。ほとんど船は揺れないのに不思議でならない。



(第三図) 乗員によるダンス

私どものうちには、船旅は始めての人が多かったせいだろう。

乗物酔いは、加速度病、動揺病ともいう。人間の平衡感覚は、内耳の前庭や三半規管で感受される平衡感覚、眼からの視覚、身体各部からの深部感覚などが、自律神経を介して小脳などに伝わり処理されて、脊髄の運動神経に司令されて保たれている。ところが日頃経験されないような動揺が身体に加えられると、その加速度刺激が前庭や三半規管に作用し、自律神経に異常な刺激が送られる。この結果、自律神経に失調を来し、顔面蒼白冷汗、めまい、嘔吐、生つば、呼吸切迫といった乗



ルーシ号船長(右から2人目)以下高級船員

物酔の特有な症状が出現する。病状の多くは、乗物から降りて安静にすれば治る。動揺病素因を持つ人は、健康人で1～5%といわれ一般に女性に多い。一方、内耳機能に障害がある場合、例えば神経性難聴のある人は酔いにくい。

私は子供の頃、船にすぐ酔ったが、今はいくら動揺しても酔はない。これも兵役で宇品から釜山、青島から宇品への玄海灘の荒波、さらに昭和18年アメリカの潜水艦に追われながら中部太平洋へ2週間の輸送船での経験が生きていて、今はいくら動揺しても船酔はしない。

ウラジオ到着5時間位前に、「シベリヤ」だと歓声があがる。小さな島が2～3海上に浮んでいる。「とうとう来たか」かすかに海岸の丘陵地帯が近づく。丘陵の間に湾口がみえる。

両側より小高い丘の迫りくる狭くなった湾内を進む。さらに進めば大小の汽船が数多く停泊し、一隻の空母ミンスク、その周囲に駆逐艦、海防艦などが取りかこんでいる。湾口



ルーシ号

(友好の船、新潟港—ウラジオストック港と甲板に横幕で書いてある)

から約5時間でウラジオストックの岸壁に接岸した。この5時間は全くの狭い湾内で、波もたたず、鏡の上を滑るような感である。

なお上記の船酔いであるが、船内の団員について大体の所を調べてみた。約70%は船酔い、あるいは気持が悪かったといい、船室や廊下には嘔吐による吐物を入れる袋がぶら下げてあった。



岸壁に掲げられた日ソ両国旗

(2) ウラジオストック

到着当日、渡辺新湊市長、市議の人々は訪ソの主目的であるウラジオストックとの友好都市盟約調印のため市庁に赴かれ、その他の人々は市内の視察に出かける。



新湊市とウラジオの友好都市盟約の調印式
(左：渡辺市長 右：ウラジオ市長)

港の背後は丘陵地帯で、街路は整っているが起伏が多い。港の見える丘、望めば停泊している船舶は幅輻し一望できる所が多い。このウラジオのたたずまいは、わが国の函館と非常に似ている。函館港も起伏が多く、市街の高所から港がみおろせる。函館は天然の良

港で幕末にロシア、アメリカ、イギリスなど外国船の寄港、ことに千島、カムチャッカ、樺太などの北洋漁業の基地として発展し、またロシア聖教の流れのトラピスト、トラピスチーヌなどのロシア風の建造物、また古い商館風の建物も今なお見られる。

ウラジオストックで、労働者の就業状況を尋ねてみたが、労働人口の30%は漁業、あるいはその加工、罐詰工業に働いている由で、その労働賃金は1日300円位、わが国の労働者とは雲泥の差である。

夕方から市主催による歓迎レセプションが市公会堂で開催され全員出席、立席パーティーであったが、立錫の余地もない位の盛況、ソ連の人々による舞踊、音楽、歌唱が始めら



歓迎パーティーの歌唱

れ、舞台の前ではウォッカやワインで一杯気嫌になった男女は人種を忘れて手をとってダンスに興ずる。宴も終りに近づくと今度はポリショイバレーに招待される。このポリショイバレー団は、モスクワのポリショイ劇場の



ポリショイバレー団の演技

錆だらけの便器

所属といわれているが、古い歴史を有し1825年に設立されペテルスブルグ（現レニングラード）でロシア人の民族舞踊として取り入れられたバレエで、宮廷と貴族の厚い庇護の下で発展してきた。この劇場ではバレエのみでなく象、馬、犬などの動物の演技、サーカスもみせてくれる。

私は10年前モスクワに滞在中、本家本元のポリショイ劇場で見た経験もあり、往時を顧みて懐旧の念新なものがあった。ウラジオの第1夜、思いもよらぬ歓待、私どもは十分に楽しみを万喫して宿泊にあてられてる岸壁に係留中のルーシ号にご帰館に相成る。

ただ一つ付け加えたいが、この公会堂のトイレの汚ないことである。便器もよごれ、金属部分は汚ない錆だらけ、シベリア人の人々の生活状態もうかがえる。

(3) ナオトカ

私は折角ウラジオに来たのだからどうしてもナオトカを訪ねたかった。幸い新湊市関係の人々のウラジオとの今後の友好の話し合いがあり、暇をもて余す人々約20名とウラジオ岸壁から水中翼船に乗り、ナオトカに向う。ウラジオ湾を日本海方面に水しぶきをあげてとぶ。約2時間にして途中北側の深い湾内に入る。狭い湾内だが奥深い。しかも湾内の所々の港湾施設が整備しており、私どもは奥深い波止場に上陸する。市の職員が懇切に案内してくれ、この市は新湊、函館、敦賀と友好都市の盟約を結び、ここより船舶の交流は盛であると話す。その人の話では年間100万立方メートルの木材を輸出しているとのことである。日本の林業は衰退の一途を辿っているが、戦後一時期南洋材に頼っていた。かつて私がインドネシアに赴いたとき、カリマンタン（ボルネオ）の原始密林で伐採した木材を筏に組んでウジンバンダン（マカツサル）まで運び、ここで船に積んで日本へ輸出していたが、現在はソ連に頼っている。

例えば、最近井波町の知人の材木問屋を訪ね、木材倉庫を見せてもらったが、以前は山形、秋田、青森から入れていたが、今はほとんどソ連材オンリー、これで井波名産の欄間や彫刻を作っているという。先頃伏木港の木材場を見たが、うず高く積まれた木材はすべてソ連材であろう。

ナオトカの岸壁にはチップ（紙の材料）がピラミッドのように積みあげられている。

私はあえてここを訪ねたのは、第2次大戦終結時、ソ連に降伏、逮捕された日本軍人、その他がシベリアで強制労働を強いられた。その主なるものは北満にいた関東軍、千島・樺太で武装解除させられた部隊57万5千人、このなかには日系の満州国官吏、植民地統治協会の幹部職員ら約1万人である。

ソ連はポツダム宣言で日本軍隊を郷里に帰すと約束したが、シベリアに47万2千人、外蒙古に1万3千人、中央アジアに6万5千人、ヨーロッパロシアに2万5千人、これらを1200ヶ所の捕虜収容所、監獄に収容し、土木関係、鉄道建設、採鉱生産工業に、ことに第2シベリア鉄道（バム鉄道）建設に5万人が強制労働に投入された。

収容所の多くは極寒の地にあり、栄養、衛生状態劣悪にノルマを課せられ、多くの死者、病者を出した。ことに（暁に祈る）や（吊しあげ）などが行われたことは帰還者の記録に物語られている。

抑留者の帰還は1946年から始まり、1950年4月にソ連は引揚げ完了を声明した。それまでに4万人の人々はシベリアの地の露と消えた。帰還の人々はナオトカから主として舞鶴港に送還されている。

この舞鶴の港で、肉親を迎えに待っている哀歎を唄った“岩壁の母”が、当時私どもの耳に流れその記憶が蘇る。

母は来ました 今日も来た
この岩壁に 今日も来た
とどかぬ願いと 知りながら

もしや もしやに もしや もしやに
こひかされて

呼んで下さい おがみます
あゝ お母さん よくきたと
海山千里 云うけれど
なんで遠かる なんで遠かる 母と子と

悲願十年 この祈り
神様だけが 知っている
流れる雲より 風よりも
つらいさだめの つらいさだめの

杖ひとつ
藤田 まさと 作詞
平川 浪竜 作曲

私どもはこの地で、日本人墓地に赴いた。街の背後の小高い丘に墓碑が並べられてある。一寸数えただけで1000、それぞれに日本字で姓名が刻まれている。しかし果して遺族が確実にその血縁と判明できたかどうか疑われる。私どもは持参した線香と花を捧げ、異郷の地に眠る人々の冥福を祈った。この墓地の入口に小さな古びた家屋があり一人の老翁が出て



ナオトカ日本人墓地にて慰霊祭



ナオトカ日本人墓地

きた。この人は墓守らしく、ここの清掃をしているという。私どもはその心根に感謝しつつ、各々いくばくかのルーブル紙幣を与え、その労をねぎらい、港へと帰路についた。

ナオトカで異郷の地の土となった日本人墓地で冥福を祈り、同市職員の案内で、市内の視察に向う。連れてゆかれた所は主として港湾施設である。

このナオトカは狭隘で細長いウラジオ湾の左側に、さらに狭い湾の奥にある。しかもシベリア鉄道はここまできているので、市ではその起点であるとの誇りをもっている。そしてその説明では、物資の輸送はコンテナに限ると私どもに云う。日本からの物資は、クレーンによって直接無蓋貨車に乗せ、ソ連のみならず、ヨーロッパ諸国へ輸送すれば、4～5日でレニングラードに着く。ここからさらに貨物船でバルト海を通じてヨーロッパ各国へとどける。南廻り、すなわち南シナ海、印度洋、紅海、スエズ運河、地中海経由よりも1/2、1/3の日数が短縮されると強調する。つまりコンテナにしてナオトカへ運ぶべきだとのことである。

さて、このコンテナ (Container) とは一定の大きい箱に貨物を積みこんで輸送することである。これは19世紀末アメリカで考案されることになった。国際規格を記すれば、横8呎、縦8呎、長さは20、30、40呎であるが、日本のJRの国内輸送は5トンコンテナ、トラック輸送業者などは10トンコンテナが用いられている。

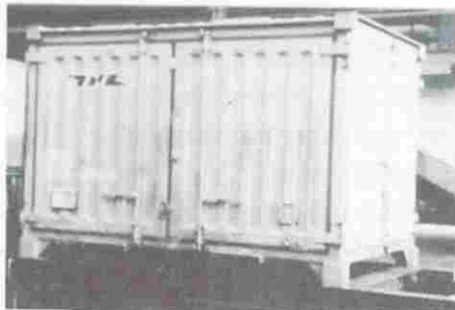
ナオトカの市職員は、先に述べたように、この宣伝につとめていた。ただこの港で見学していると北洋材、主として針葉樹などはクレーンで貨物船の船槽に積みこまれており、製紙用と思われるチップなども同様であった。

さてシベリア鉄道であるが、ヨーロッパと極東を結ぶ幹線鉄道で、1891年、西はチエリヤビンス、東はウラジオストックを起点と

して同時に着工し、日露戦争の情勢緊迫に対処し、先ず東清鉄道（ハルビン経由）の短絡路によって1904年に完成している。

日露戦争で敗北し、日本の勢力の範囲が、満州（現 東北地方）に及んだため、ハバロフスク廻りとし、1916年に完成、始めは単線であったが、1965年に複線が完成した。このように日本からヨーロッパへの輸送路にこの鉄道を利用してくれと宣伝これつとめていた。

なお、余談であるが、世界で最も長い直線鉄道はモスクワ～レニングラードである。約1000キロ近くある。これについて私がかつてモスクワで聞いた挿話がある。そもそも鉄道路線の新設には北陸への新幹線の路線について、通過地域、高崎～軽井沢間で、附近住民とJRで大もめにもめている。上に述べたモスクワ～レニングラードでも同様であったらしい。当時このことがツアー（皇帝）の耳に入り、ツアーは定規をもってペンで線をひきこの通りにやれと厳命した。それで世界で一



コンテナ（高岡駅にて）



明治38年、日本海海戦にてロシヤウラジオ艦隊が全滅したなか、この1隻オーロラ号がウラジオ港に逃げこみ現在、レニングラード・ネバ河に繋留され、観光客の参観に供している。

番長い直線距離の鉄路が出来あがったと聞かされた。私は10年前、夜行特急「赤い矢」で通ったことがあるが、暗闇のなかを走り、周辺の風光を賞でることができなかった。

コンテナを緒としてシベリア鉄道について思いをのせたが、ナオトカの市職員の説明も当をえていると今でも思っている。ちなみに日本で直線距離の長いのは千歳線にあり、追分～栗山間の約30キロ弱で、ここはもともと荒蕪地で人家も疎、また耕作地も殆んど皆無に等しかったせいでもあったろう。

ウラジオストックにて各種の友好行事、あるいは観光を済ませ、5月18日20時15分、ハバロフスクに向う。シベリア鉄道に乗ることとなる。私は中学時代に、この鉄道はウラジオ～モスクワ～ペテルスブルグ（現レニングラード）と教えられたように覚えていたが、ナオトカ滞在中、案内してくれた市の職員は、ナオトカはシベリア鉄道の起点であると誇らしげに説明してくれた。ナオトカ～ウラジオ間陸路約40キロ、鉄道が敷かれてある。そうすればナオトカが起点かも知れない。

乗せられたのは寝台特急、約400人近いわれわれ団体の貸し切りである。2段ベッド両側で4名1部屋、中央にテーブルがある。そろそろ眠気がきそうだが、部屋内は各々談論風発、どうしても酒がないと話がすすまない。夕食は図のようなものをサービス係の女性が配ってくれる。やはり酒がないと話にならん。酒を注文する。ただしこれは自弁。もってきたのはウオツカである。ご承知かも知れんが、これは世界の酒類で最もアルコール度が強い。資料を調べてみると、ビール4.4%、ワイン13



夜食

%, 日本酒15~16%, 焼酎20~35%, ウィスキー37~43%, そしてウオツカは60%で酒類のうちで最も高率である。段々眠気に襲われたのか、そこそこに酩酊が洩れる。

緯度が北にあがり、北極圏が近づくのか、夜明けが早い。鉄道の左右はなだらかな丘陵地帯で農家が点在している。家の周辺には耕地があり、野菜や小麦らしいものが窓外に見られる。



鉄道沿線の農家

10年前、イルクーツクに赴いたとき、当時のサラッキー市長が云った言葉を思い出す。それは、「シベリアは広大な地域に人口が分散している。これらを人口1万単位の集落にして、各種の文化施設を整備して生活させねばならない」と窓外に見る風景、心なしか集落的の存在が所々にみられる。

10時50分ハバロフスク駅に到着。このハバロフスクの名称は1649年、アムール地方を探検し、ヨーロッパロシアより最短路の行路を発見し、この附近に堡壘を建設している。その開発者ハバロフを記念しての名称と伝えられている。



ハバロフスクの駅と駅前のハバロフの銅像

到着後インツーリスト・ホテルにてしばしの休養。午後より市内観光。先ずアムール河。ここは中ソ国境で、この河は中国では黒龍江といい、本流のみで2.824km、幾多の支流をこのハバロフスクで集め東流し、無数の屈曲を繰り返してオーツク海に流れ込む。



インツーリスト・ホテル

河岸にて観光船に便乗し、中流に出たが、向う側は中国領、数多くの島が河のなかに浮んでいる。大きい島は、私の眼では石川県の能登島位に見える。またこの大河のなかのどこからがソ連領で、中国領か区別がつかない。そのため中ソ両国が、珍宝島事件として干戈を交えたことが記憶に残る。一応アムール河の観光を終え、戦勝記念慰霊碑へ案内される。この記念碑の前壇の中央に炎が燃えている。この炎が何を意味しているか聞きもしたが、イルクーツクにも同様のものがある。ただ「永遠の炎」といつている。その前にピオニール（共産党少年団）が赤いネクタイを首に巻き直立不動で衛兵の役目をしている。私自身、第2次大戦中、西側の連合軍と戦ったが、一般兵士はその真意を知らず戦没している。その意味で私どもはこの慰霊塔に心からなる弔意を表し冥福を祈った。

この塔の前で驚いたのは、このピオニールらが私どもの前へ集ってくる。何だといえば、チューインガムを呉れという。私は所持していなかったが、他の人々で呉れてやっている人もいた。もらった子供らは小さなバッヂを私どもの胸につけてくれる。また大人の連中は寄ってきて、ライターを呉れとねだる。こ

れにはそう沢山もっていた人はおらず、ノー・ノーと断った。

そろそろ帰りの土産物に気づいて、皆さんと土産物屋へ行く。ここがまた面倒なことの上なし。団体で行くと行列につかねばならない。品目をみて、欲しいと思うと伝票を切ってくれる。その伝票をもって、金額の収納所へ行って金を払う。それからここで領収書をもって確認のスタンプを押す所へ行き、また元にもどって計算所で確認してそれから陳列棚にもどり、それを見せる。ここでもしばらく待たされる。そこで金額を払ったことを確認して店員が計算所に品物を渡す。最後にそこに戻って品物が手に入るわけである。腹立たしくて買う気がなくなる。このことは共産圏（中国は別だが）東欧諸国も同様である。かつてチェコスロバキヤで有名なガラス細工の店へ入り、気に入ったガラス細工を買おうと思ったが、余り面倒で買わずに帰った記憶がある。

しかしシベリヤ琥珀が有名で、しびれを切らしながら買い求めた。この琥珀は地質時代、スギ・マツ・ヒノキ類の樹脂が埋ずもれて化石となったもので黄色、脂肪様の光沢が著しく、透明ないし半透明で装飾品として用いる。とくに透明のなかに模様入りのものは「虫くいこはく」といって特に高価である。この琥珀はアジアでは中国、ビルマ、インドにも産出され、中国では古来、七宝の一つに数えられている。

私ども同行の人々も、奥方様(?)の土産として眼を皿のように逸品を探し求めていた。土産物探しに熱中しつつハバロフスクの日程を終え、ホテルへご帰館となる。

ハバロフスクからイルクーツクへは空路となる。上空から俯がみすれば、蛇の如く屈曲するいくつもの河がくっきり浮かんでいる。これらはモンゴル高原に源を発し、北極海に注ぐレナ河の上流と教えられる。機内からの放送でイルクーツク空港は目下修理中でウラ

ンデウに着陸、それよりバスにてイルクーツクに向うと伝えられる。

ウランウデウに着陸すれば、この空港には数十機のミグ戦闘機が翼を並べている。ここはソ連の極東に対する重要な空軍基地で、太平洋方面への作戦の要である。ここよりバスに乗り換えイルクーツクに向う。約小1時間、イルクーツクは東シベリアの首都的性格を持ち、整備された街並その中央には清冽なアンガラ河が流れ街を2分し中心地は左岸にある。ホテルもアンガラホテル、豪華なものであった。

私は昭和54年、金沢大学訪ソ学術交流団長としてこの地を訪ね、曾遊の地である。ここイルクーツクは金沢市と姉妹都市、その関係から、当時の岡良一金沢市長のすすめによりイルクーツク大学との姉妹校の提携の交渉に訪ねたわけである。しかし今日に至るまで音沙汰なし。ただ姉妹大学になると、両者の研究者の交流が当然行われる。そうになると、科学部門では高次の研究は外国に利用される懼があり、とくに軍事に関するものについての海外への漏れる懼もおもんばかったのかも知れない。



アンガラ河の発電所

なお附言すれば、金沢大学ではアメリカでは、バツファロー大学、ペンシルバニア大学、フランスのナンシー大学、西ドイツのレーゲンスブル大学とは姉妹大学、あるいは友好大学となっている。とくにペンシルバニア大学

以外のバッファロー、ナンシー、レーゲンスブルグは私の学長時代盟約を結んだものでなつかしい。なお、イルクーツクでは当時のサラッキー市長、リハチョーフ副市長に会って、久闊を叙したかったが、市長は物故され副市長は消息不明で残念であった。

ホテルで休憩後、市内観光、とくに印象に残ったのは教会である。私の感じではカトリック系らしいが、沢山の参詣者で、各々ローソクを聖壇に供え、礼拝を続けていた。またここにも戦没者の慰霊碑「永遠の炎」があり、ハバロフスク同様、赤いネクタイを結んだピオニールが待立していた。とくにこの中央の商店街に「金沢通」と日本語で記した横断幕がかかげられており、最近金沢市との交流があるのかどうかかわからないが印象が深かった。

このイルクーツク市は人口50万、大工業都市で近くに炭田もある。とくにかつて訪ねたとき、発電所の建設中だったが、今はアンガラ河に堰堤が完成し、その発電所の出力70万キロ、この電力で工業を支えている。ちなみに富山県の黒部川の全発電量48万キロで、1カ所で遙かに大きな発電力がある。



バイカル湖附近の残雪（5月26日）

1泊後の翌日、バイカル湖の観光に赴く。前回は未だ堰堤が工事中で、イルクーツクより約50キロ、急流岩を噛むアンガラ河岸をバスにて赴き、案内してもらった副市長リハチョーフ女史のソプラノ調の「カチューシャ」の唄が、今でも耳朶の奥から蘇える。約1時間余で湖岸に達する。

このバイカル湖はその面積3万3千平方キロ、琵琶湖の約50倍、長さの最長部636キロ、幅最長25キロ、細長い湖でこのなかに22の島



バイカル湖岸の農漁村落

がある。水深の最も大なる所1640米で世界一、その透明度は40米で日本の摩周湖と並んで世界で最も澄んでいる湖の一つである。2時間で湖口に達した。ただし今回はイルクーツクまでダム化され、イルクーツクより水中翼船により、波しぶきをあげて1時間たらずで湖の船着場に達する。その附近はなだらかな丘陵地で、レストラン、ホテルも数ヶ所並んでいる。かつ結核療養所や保養所もあり、病棟が幾重にも並び、一寸見た所1000床以上のように思われる。都塵によごされず静寂で、しかも水は清く、病気の療養に最適の感がする。附近には集落を形成している部落もあるが、農漁業を主としているらしい。湖畔を少し散歩してみると5月20日というに所々残雪がある。



バイカル湖附近の村落

この附近の家屋をみると、丸太を並べて積み上げ壁となし、その隙間を泥土でうめ、上

には厚い布で風の入るのを防ぐ仕掛になっている。湖畔から左側に比高400米位の山があり、その頂上付近まで患者の運動や病後にリハビリがてらに歩かせる散歩道があると聞いたので、自由行動の時間の余裕もあり、山頂よりバイカル湖を眺めんと登山に挑戦してみた。約1時間近くかかって汗をかきかき登行したが、途中で大部分落伍し、頂上付近に達したものは私を含め2、3名。しかし頂上付近は樹木が群生し、しかも前方の山が邪魔して、バイカルの透見はできず残念であった。予定の時間が来たので下山し、バスに便乗してイルクーツクに向け発車した。



高台よりバイカル湖を望む

バイカル湖よりの帰途、ガイドが珍しいものを見せるといって、途中でより道をする。ここは小高い丘で、何の樹木か知らないが、樹の枝や幹に小さな紙片や布切れが無数に結びつけてある。その「いわれ」を聞いてみると、ヤクート人の幸福の願をこめての「おまじない」だそうである。所変われば品かわるで、わが国では、天神様のお社などで、大学入学や、いい結婚などの願をこめてお札やおみくじを境内に結びつけるのと軋を一にする。

さてこのヤクートは、ロシア人がシベリヤに進出以前からその地方地域に住んでいた。16世紀末には2万五千人位いた。彼等の富は家畜で、馬は橇を引き、雌馬の乳からクムイス(馬乳酒)を、牛の乳からバター、その他の乳製品を作り、肉は食用に供せられた。毛皮は衣服、覆物など広く用いられた。

長いきびしい冬の間、牛は用意された乾草、馬は屋外の牧草で飼われた。この辺りは人家の存在は疎で、集落を作っていないので、家屋を中心とした広い土地が利用でき、所々に小さな小屋が散見される。その小屋は勿論住居であるが、概ねひと間、簡単なベッドが並べてある。その生業といえば、今でも狩猟と魚撈が主なものである。

ロシア人がこの地方に進出したのは17世紀中葉で、シベリヤ南方に住んでいた原住民ヤクートは次第に北へ追いやられ、彼等の以前からもっていたものの多くを失った。とくにロシア人は、彼等からサヤク(毛皮税)をとり、今まで牛、馬、羊ラクダなども飼っていたものが、北方へ移動せざるをえなくなり、家畜も飼養できなくなり、魚や動物及び鳥の肉などで生命をつないだ。魚は馬の毛で作った網や細い割竹で作った筌(ヤナ)で捕えていたといわれる。

私は今度の旅行で、かつての旅で見なかったヤクートという民族の本当の姿に接し、新しい知識をうめこまれた。ことにヤクートにとって山や森、湖、河、水、草、けもの、家畜、火、住民などいっさい霊をもつものであった。霊には人間に災をもたらす悪霊と、人間や家畜を守る善霊とがあり人々はそれらの霊の気に入るように、色々の呪を考え出すようになったと伝えられる。冒頭に述べた樹の枝や幹に小さな紙片や布切れを結んでいるのもそのあらわれのように私に思われた。



最後に附記するが、ソ連の国民の生活はど

最後に附記するが、ソ連の国民の生活はどうか。その憲法第1条に「ソビエト社会主義共和国同盟は労働者、農民の社会主義国家である」、第6条に「土地、地中の鉱物、水、森林、工場、鉱坑、鉄道、銀行、農業的企業(ソフォーズ)、公共企業主要な住宅施設はすべて国有、すなわち全人民の財産である」と。

私どもは、この珍しいヤクートのお呪を見

物してイルクーツクに向った。

翌日ホテルより再びバスにてウランデウの空港まで至る。ここにて機上の人となり新潟に向う。途中ハバロフスクに寄ったものの、船旅で50時間かかったのが、ここより約2時間余で日本海を横断、新潟より高速を利用して高岡へ、全員元気にて夕刻、高岡帰着。